

宿柄崎より三十三丁是迄 佐賀の御領なり、人家百餘軒、宿屋多く、茶屋もあり、申刻頃大田平七といふにつきて宿る、此所に温泉あり、町屋の南裏の川端なり、川の中よりも湯涌出、湯槽すべて七あり、十文湯二、五文湯三、留湯二なり、湯槽ごとに、湯口水口左右に分れあるを浴する人の好みに随ひて加減をし、或は熱を好めるは湯口に近く居、ぬるきを好めるは水口に近く居て浴するなり、効能は腰痛を癒すを第一として、其外も万づによしといへり、

〔肥前風土記藤津郡〕鹽田川在郡北

此川之源、出郡西南託羅之峯、東流入海、潮滿之時、逆流沂細流勢大高、因曰潮高滿川、今訛謂鹽田川、川源有淵深二許丈、石壁峻峻、周匝如垣、年魚多在、東邊有湯泉、能愈人病、

○按ズルニ、此ハ今ノ嬉野温泉ナルベシ、

〔日本風俗備考附錄二十〕江都旅程記の一

嬉野にて午飯を喫ふ、温泉を觀るに、婦女集りて頻りに物を望みし故、細貨を分ち與へたり、夜に入、タケウヲに泊れり、此地亦た温泉ありて、美麗なる國主の浴室を觀たり、

温泉嶽温泉

〔和漢三才圖會八十〕温泉嶽 在高木郡五十町上有善賢嶽

往昔有大伽藍、號日本山大乘院、滿明密寺、文武帝大寶元年、行基建立三千八百坊、塔有十九基云々、天正年中、耶蘇宗門盛行、僧俗陷邪法者多、當寺僧侶亦然、故破却不歸正法者、生イナカウ身陷、當山地獄池中、礎石或石佛耳、今唯僅有一箇寺及大佛而已、方一里許中、稱地獄穴數十箇處、兩處相並、高五六尺、黑泥煙湧起、名之兄弟地獄、黃白帶青色、沫滓似麴者、名之麴造屋地獄、青綠色似藍汁者、名之藍染、家地獄、濁白色稍冷似水泔者、名之酒造家地獄之類、名目亦可笑、出猛火可謂等活、大焦熱者、亦有矣、其流水稍熱、如湯之小川中、每小魚多游行、亦奇也、凡一山地、皆熱濕透鞋、跣者難行也、麓温泉多、有浴湯人不絶、